

文献から見る日本のハロウィーン受容史—大正・昭和戦前—

佐々木 隆

プロローグ

本稿は拙著「日本のハロウィン今昔物語：明治時代に紹介されたハロウィン」(『ポップカルチャー・若者文化研究』(第1号、2020年2月)を受けて、大正(1912年～1926年)及び昭和戦前(1926年～1945年)における日本のハロウィーン受容状況について考察するものである。筆者はこれまでにハロウィーンに関して考察を加えてきたが、今回もその一環である。

イベントとしてのハロウィーンはまだ日本では行われていない時期の文献上に現れたハロウィーンについて調査を行った。すべての文献を調査することができないため、「事典類」及び「海外体験者によるハロウィーン談」「英米文化事情等の紹介」などを中心に挙げた文献に注目した。

1 大正・昭和戦前の「ハロウィーン」紹介：事典類

ここでは大正・昭和戦前の事典類に登場したハロウィーンについての調査結果を時系列で紹介しておきたい。明治初期から英語教育が推進されてきたが、明治時代の英語辞典類では「ハロウィーン」、「万聖節の前夜(祭)」がそれほど見出し語として採用もされていないため、明治後半よりの辞典類について時系列で紹介しておきたい。

神田乃武編『新訳英和辞典』、三省堂、1902年6月

「Hallow 神聖スル。崇敬ス。」⁽¹⁾

「Halloween 萬聖節ノ前夜」⁽²⁾

長谷川方文編『新英和辞林』、六盟館、1903年3月

「Hallow 神聖ニスル：崇メル」⁽³⁾

「Halloween 祝祭日ノ前晩」⁽⁴⁾

※字が磨滅しているため、祝と晩が違う字の可能性はある。

磯部清亮編『最近英和辞林』、波多野商会、1904年9月

「Hallow 神聖ナリト崇敬スル、神聖トナス」⁽⁵⁾

「Halloween」見出し語なし

「Hallowmas 祭祀ノ名」⁽⁶⁾

金澤庄三郎編『辞林』、三省堂、1907年4月

「諸聖人の祝日」見出し語なし

「ハロウィン」見出し語なし

「ハロウィーン」見出し語なし
「萬聖節」見出し語なし
「萬霊節」見出し語なし

上野洋一郎等編『学生英和辞典』、博報堂、1910年11月
「Hallow 神用に供する、奉納する」⁽⁷⁾
「Halloween」見出し語なし

郁文舎編『辞海』、郁文舎、1914年4月
「諸聖人の祝日」見出し語なし
「ハロウィン」見出し語なし
「ハロウィーン」見出し語なし
「萬聖節」見出し語なし
「萬霊節」見出し語なし

上田萬年・松井簡治『大日本国語辞典』、第2巻、金港堂書籍、1916年10月
「諸聖人の祝日」見出し語なし

上田萬年・松井簡治『大日本国語辞典』、第4巻、金港堂書籍、1919年12月
「ハロウィン」見出し語なし
「ハロウィーン」見出し語なし
「萬聖節」見出し語なし
「萬霊節」見出し語なし

神田乃武・金沢久編『袖珍英和辞典』、三省堂、1922年4月（大改訂81版）
「hallow 神聖ニス。尊敬ス」⁽⁸⁾
「Hallowmas(s) 萬聖節、諸聖徒日」⁽⁹⁾
「Halloween」の見出し語なし

上野洋一郎等編『学生英和辞典』、博報堂、1910年11月
「Hallow 神用に供する、奉納する」⁽¹⁰⁾
「Halloween」の見出し語なし

梶康郎編『新式漢和大辞海』、大日本教育書院、1922年3月
「萬聖節」見出し語なし
「萬霊節」見出し語なし

木川又吉他編『現代大辞典』、大日本教育通信社、1922年11月

『現代用語辞典』、「Halloween」見出し語なし

『常識英語辞典』、「Halloween」見出し語なし

今回の調査では Halloween が最も掲載されたのが早かった英和辞典は神田乃武編『新訳英和辞典』(1902)であった。しかし、Halloween は掲載されていなかったものの、実は堀達之助[編]『英和対訳袖珍辞書』(1862)には Hallowmas が掲載されたことも注目に値する。なお、調査した国語系の辞典では「ハロウィン」「ハロウィーン」「万聖節」などの見出し語は見当たらなかった。また、新聞記事をまとめた明治ニュース辞典編集委員会編『明治ニュース事典』(総索引、1986)、大正ニュース辞典編集委員会編『大正ニュース事典』(総索引、1989)には「ハロウィーン」は見当たらなかった。昭和戦前の辞書類については以下の通りである。

岡倉由三郎編『新英和中辞典』、研究社、1929年夏(奥付なし、序より)

「Halloween 萬聖節(ばんせいせつ)の宵祭(十月三十一日夜)」⁽¹¹⁾

「Hallowmas 萬聖節(十一月一日)」⁽¹²⁾

岡倉由三郎編『初級英語辞典』、研究社、1933年9月

「Halloween 萬聖節(ばんせいせつ)の宵祭(十月三十一日夜)」⁽¹³⁾

「Hallowmas 萬聖節(十一月一日)」⁽¹⁴⁾

昭和中学会編輯局『昭和中等英和辞典』、昭和中学会、1935年6月(第3版)

「hallow」の見出し語なし

「Halloween」の見出し語なし

「Hallowmas」の見出し語なし

昭和戦前の文献調査はあまりできなかったが、Halloween は研究社の定番の英和辞典では見出し語としてほぼ定着していたようだ。

事典・辞書類ではないものでハロウィーンではないが、萬聖節を取り上げているものもある。大島清『片言まじりの佛蘭西行き』(白水社、1930年1月)には「La Toussaint」 et la fête des Morts. 萬聖節と死人祭」でもハロウィーンは取り上げられていない。ここでは萬聖節は11月1日、死人祭は11月2日のことである。

暫く佛語研究に精進した結果、大概のことは解るつもりの野老山君も、Toussaint だの、Fête des Morts だのと言はれては、ろくな感違ひさへも出来ない。でも、感心なことには、なんとかかいへば先生直ぐ辭書を擔ぎ出す(avoir recours au dictionnaire)。お蔭で(grâce à cela)、Toussaint は「11月1日に聖者の靈を祀る祭典」Fête des Morts は「煉獄の苦を嘗める死者の靈を慰める爲め、11月2日に墓参をすること」、要するに(en somme) 日本のお盆に當るといふ所を突き止める。⁽¹⁵⁾

2 大正時代の紹介：水谷まさる「アメリカ通信 萬聖節の前の晩」(1920)

大正時代は「子供」に焦点があてられた時代と言っても過言ではない。その一例として児童文学という考え方に注目しておきたい。拙著『書誌から見た日本ワイルド受容研究(大正編)』(2007)でも次のように指摘した。

児童文学の本質の究明による学問的な光が当て始められたのは戦後になってからのことである。昭和22年(1947)12月に児童福祉法、昭和26年(1951)5月の児童憲章が制定され、子供の人格や権利が保障されるようになったことが大きな要因であろう。大正時代には早くも大正13年(1924)11月の有富郁夫『児童文学十講』(東京出版社)、大正14年(1925)9月の富山師範附属小学校編『児童文学の研究』(明治図書)のように「児童文学」という呼称も使用されているが、明治時代では「お伽噺」、大正時代からはほとんどが「童話」という表現であったようだ。⁽¹⁶⁾

鈴木三重吉(1882-1936)は子供のための読み物について、当時の政府等が推奨する説話や唱歌に異を唱え、子供の情緒を育むための話・歌を創作することを目的に1918年7月に雑誌『赤い鳥』を主宰発行した。しかし、こうした流れも西欧の影響を受けてのものだ。エレン・ケイ(Ellen Key, 1849-1926)が明治33年(1900)に『児童の世紀』を発表し、20世紀を「児童の世紀」と呼んだことは、当時の日本にもその波動は届いていた。

近代的児童文学研究は、児童研究の中に、教育・心理学研究の一環として発展過程をたどる。この時期はエレン・ケイ(Ellen Key 1849~1926)の『児童の世紀』(1900)が国際的に大きな反響をよび、邦訳の大村仁太郎『二十世紀は児童の世紀』(1906)が教育界に衝撃をあたえる時期とかさなってくる。児童学会の児童研究も「児童の世紀」に触発されてもりあがっていく。⁽¹⁷⁾

こうした中で大正時代は子供への関心が高まった時代でもある。

コドモ社編『童話』(第6巻第12号、1920年2月)には水谷まさる「アメリカ通信 萬聖節の前の晩」としてハロウィーンが紹介されている。4つのパートに分かれている。第1パートの冒頭は次の通りである。

萬聖節の前の晩—と書くと、いかにも長ったらしい、けれど、日本語に譯してみると、どうしてたつておかに書きようがない。英語では、ハロウィンと書けばそれでちやんと済むのだけれど・・・

ところで萬聖節といふのは、天上に於てもろもろの聖徒を、お祭りする日のことで、キリスト教の祭日なのである。毎年11月1日が、その日にあたるのだ。それゆえ、萬聖節の前の晩—すなはち、ハロウィンは、10月31日の晩ことをいふのである。⁽¹⁸⁾

第1パートでは萬聖節とその前夜の説明が行われている。しかし、「今はこのハロウィンが、だいぶ變つたものになつて来てゐる」⁽¹⁹⁾と指摘している。第2パート以降、ポイントになる点を紹介しておきたい。雑誌『童話』ではケルトやドルイド教については言及がないが、概要は説明されている。中でも注目しておきたのは「英國のアイランドあたりで、強く信じられてゐたものらしい」⁽²⁰⁾とあり、以降はアメリカのハロウィーンについて触れている。

さて、ごぞんじのとほり、アメリカへはじめて渡つて来たのは、アイランド人である。彼等は宗教のうへでけんくわをして、アイランドいゝるのがいやになつたので、新しい國へ行つて、思ひのまゝの暮しをしようといふわけで、はるばると渡つて来たのである。

そのうちに、アメリカへは、ほかの國國の人が渡つて来て、今のやうなアメリカになつてしつたが、さて、アメリカ人といふ名で、すべての人がまざり合つてしまつた今日、ハロウィンも變つて、アメリカ式になつてしまつた。

そんなら、アメリカ式のハロウィンとは、どんなものか？

昔の人々が、ハロウィンの傳説を信じれば、どうしたつて、その晩はこはい晩なのだから、家に閉じこもつて、びくびくしたにちがひない。またたつた一晚だけのことだから、すだまや、倭人や悪魔や、幽霊などに、ごちさうぐらゐして、がきげんをとつて、いぢめられないやうにしただらう。

ところが、いまのアメリカ人は、そんなものがやつて来たら、器械の力で生捕つて、博物館へでも飾らうといふんだから、どうしてどうして、この連中だつて、うかつに出て来やしなさい。出て来ないとすると、却つてもの足らぬ。そこで、わざわざ、じぶんから進んで、そんな連中の假装をするのである。そして、ハロウィン・パーティといつて方々の家で會を開いて、踊つたりふざけたり、いたづらをしたして、一晚を遊ぶのである。もちろん、こんなことは、子供の方がずっと好きだ。だから、ハロウィンが近くと子供たちは、假装の支度に夢中になつてゐる。⁽²¹⁾

ここではまず悪魔や幽霊が出現し、ごちさうすること、假装すること、ハロウィーン・パーティーを開くこと、子供が夢中になることが指摘されている。

パート3はおそらく水谷のがニューヨークでのハロウィーン経験談であろうと思われる内容となっている。その冒頭は以下の通りである。

「ミスター」

と、隣の建物の、左角の文房具屋の息子が、わたしを呼ぶ。十月の末のことだった。

「なんだい？」

と、わたしは、戸口に入らうとしてふり向いた。すると、その子は笑ひながら、

「ハロウィンには、ミスタアをどかすよ。」といふ。

「いいともー」⁽²²⁾

迎えに来た子供たちの様子が紹介されている。

この約束を、わたしはそれなり忘れてみたが、ハロウィンの夕方、夕飯を食べに出ると、戸口の前に、五六人の子供たちが、めいめいに白い敷布をかぶったり、大人の外套を着こんだり、紙でつくった南瓜提灯をぶらさげたり、赤い布を頭に巻いたりして、わたしのまはりを取り巻いた。そして例の息子は、わたしの洋服をつかんでひつぱった。また、もう一人の子供は、ぎいぎいと、へんてこな音をたてるおもちゃを持って、わたしの耳のそばでうるさく鳴らしたてた。

なあに、日が暮れて間もない頃、ニューヨーク市の町なかで、そんなことをしたつて、わたしはすこしもおどかさされやしない。⁽²³⁾

このあと子供たちが幽霊やすだま(魑魅)の仮装をしたりしたとの紹介がある。白い敷布を被ってというのがその方法のようだ。

パート4は南瓜の提灯、黒猫、ハロウィーン・カードについて水谷が興味を寄せ、宿の婆さんに聞いてみたが、はっきりとした返答はしてもらえなかった。

最後は次のように締めくくられている。

今度は、ハロウィンの、せんぎだてが、だいぶやかましいかつたから、アメリカ通信としては、おもしろくなかつたかもしれぬ。けれども、とにかく今のアメリカに、いくらアメリカ式であるとはいへ、かうした童話味のある年中行事があるのはなかなかおもしろいではないか!⁽²⁴⁾

水谷まさる(1894-1950)についてはインターネット上の「日本大百科全書(ニッポニカ)」の二上洋一「水谷まさる」ではつぎのような解説がある。

詩人、児童文学者。東京生まれ。本名勝。早稲田(わせだ)大学英文科を卒業。コドモ社に入社、東京社を経て著述生活に入った。『良友』『童話』『金の星』などに、童謡や童話、読み物を発表。1928年(昭和3)千葉県三、酒井朝彦らと同人誌『童話文学』を創刊、『手袋』『野ばら』などを発表した。子供たちの実生活のなかのささやかな事件を、ヒューマンな心情で描いたものが多い。童話集『葉つばのめがね』(1935)のほか、少女小説も多い。⁽²⁵⁾

同様に、「デジタル版 日本人名大辞典+Plus」の解説も見ておきたい。

1894－1950 大正・昭和時代の童話作家。

明治27年12月25日生まれ。少女雑誌の編集者をへて著述生活にはいる。昭和3年

千葉県三らと同人誌「童話文学」を発刊、同誌に「手袋」「野ばら」などを発表した。昭和25年5月25日死去。55歳。東京出身。早大卒。本名は勝。作品に童話集「葉つばのめがね」、詩集「水色の花」など。⁽²⁶⁾

明治時代の田村哲『外遊九年』（1908）ではアメリカ留学中のハロウィーンの体験をハロウィーンに関する起源やそれにまつわる遊戯や行事、当時の大学生達がどのように楽しんでいたかが紹介されていた。一方、水谷まさる「アメリカ通信 萬聖節の前の晩」ではアメリカ式のハロウィーンと子供達がどのようにハロウィーンを楽しんでいるのかが紹介されている。水谷が童話作家であるため、子供への関心が高かったのは頷けるところだ。

因みに、日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』（第3巻、講談社、1977年11月）には「水谷まさる」の見出し語があるものの、アメリカ留学に関する内容はなかった。

3 ラフカディオ・ハーンの「ハロウィーン」紹介

小泉八雲（ラフカディオ・ハーン, Patrick Lafcadio Hearn, 1850-1904）の Patrick とはアイルランドの守護聖人・聖パトリックであるが、この「パトリック」について触れられることはあまりない。

ハーンは明治時代には東京帝国大学で英文学を講じ、その後任が夏目漱石（1867-1916）であったことは周知の通りである。ハーンは日本に帰化し、小泉八雲と名乗ることになるが、ハーンの日本での出版された著作物について注目しておきたい。大谷正信『小泉八雲全集』（第17巻、第一書房、1928年1月）には「萬聖節の夜」のエッセイの翻訳が収録されているが、特にハロウィーンについての言及はない。「萬聖節」については注釈で次のように解説されている。

天主教に於いては、11月1日が諸聖徒を祭る日となつてゐる。⁽²⁷⁾

念のため平川祐弘編『小泉八雲事典』（2000）を見ても項目として「萬聖節」「ハロウィーン」はなかった。しかし、同じく戦前に出版されたものも見ておきたい。小泉八雲／西崎一郎編『BUYING CHRISTMAS TOYS』（北星堂書店、1939年12月）には“Halloween”が収録されている。北星堂書店は大学の英語教育用の教科書なども多数出版している出版社である。その記述内容の下位項目には“In America”“English Customs”がある。初出は（*The Cincinnati Commercial*: October 31, 1877）とある。

冒頭は以下の通りである。

TO-NIGHT is Halloween. The night of all others in the year when ghosts and spirits walk abroad—when churchyards yawn and give up their spectral deizens. 'Tis the night of all others that the supersititions and credulous maids and

lads practice pranks of legerdemain, and by trickor witchcraft summon forth the hobgoblin crew of fairies, witches, spirits and spectral shades. ⁽²⁸⁾

今夜はハロウィーンである。一年中でとりわけこの夜は、幽霊はや霊魂が徘徊する夜—教会の墓地があくびをし、店子の幽霊から目を離す夜である。それはまた、とりわけ迷信にとらわれやすい青年男女が悪ふざけのいたずらをし、いたずらや魔術によって妖精や魔女、霊魂や亡霊などお化けの類いを呼び寄せる夜である。⁽²⁹⁾

アメリカの様子については“*In America*”の中で次のように紹介されている。

The night has been invariably observed in the Southern States. To young ladies of a tender age, Byron calls it the bread and butter age; to boarding-school misses Halloween has peculiar charms: 'tis then they consult the fortune-teller, and before the late unpleasantness, on the large plantations of the South, the conjurer, always an old maid who “threw spells,” raked into her coffers many a hoarded half dollar from the ignorant slaves and the young “missuses.” In the college towns students play all sorts of pranks, and the pleas of Halloween throws the shield of immunity over all their tricks. ⁽³⁰⁾

ハロウィーンの祭りは南部諸州でよく行われてきた。バイロンが「まだ子供っぽい」と呼んだ年端のいかない若い娘たちや、寄宿学校の女生徒たちにとって、ハロウィーンはとくに魅力のある日である。彼女たちが占い師に運勢を見てもらったりするのはこの日であり、先の戦争の前に南部の大農場で「呪文をかけたい」占い師—それは決まってオールドミスである—が、無知な奴隷や若い奥さん連中から貯金箱にためた 50 セント銀貨をかき集めたのもこの日である。

大学のある町では、学生たちがどんな悪ふざけをしても、ハロウィーンだからという理由で大目に見られる。⁽³¹⁾

イギリスでの様子については“*English Customs*”で紹介されている。

In merrie old England are the the rites of this night most rigorously observed. In the North of England it is called Nutcrack night, because then nuts and apples predominate as the humble fare around the farmer's iredside. The nuts are not only cracked and eaten, but play a prophetic part in love affairs. ⁽³²⁾

「古き良きイングランド」では、ハロウィーンでは、ハロウィーンの儀式はきわめて厳格に守られている。北部では、農家の暖炉を囲んでささやかな食べ物としてナッツやリンゴの出されることが多いので、この夜は「クルミ割りの夜」と呼ばれている。ナッツは割って食べるだけでなく、愛情の予言にも用いられる。⁽³³⁾

日本語の翻訳は森亮他訳『ラフカディオ・ハーン著作集』第2巻、1988)からのものだ。

このあとはロバート・バーンズ (Robert Burns, 1759-1796) の詩 “Halloween” が紹介されている。

エピローグ

大正・昭和戦前の時代でもハロウィーンをイベントとしての日本で開催している文献には辿り着くことはできなかった。しかし、海外でのハロウィーン体験の紹介が複数見いだされるようになったことは明治時代より異文化体験や英米文化事情をさらに受け入れる土壌が進んだと考えられよう。

水谷まさる「アメリカ通信 萬聖節の前の晩」(1920) はアメリカでの子供との交流が紹介されている点で、庶民のハロウィーンがわかるところだ。また、今回のリサーチで特に目を引いたのは小泉八雲／西崎一郎編『BUYING CHRISTMAS TOYS』(1939) に所収されていた “Halloween” である。英米のハロウィーンをリサーチすると必ず紹介されるのはバーンズの詩 “Halloween” であるが、今回初めて、ハーンの新聞記事 “Halloween” に辿り着いた。ギリシア生まれのハーンが、イギリスとアメリカでの経験を踏まえて寄せた記事である。非常に興味深い記事である。明治から昭和戦前の時代は文明開花、教養主義等の流れから知識としてだけハロウィーンが紹介されていたわけではない。体験談なども紹介されるようになったことは英米文化事情全体への興味・関心が広がりを見せている一端でもないだろうか。

引証資料

- (1) 神田乃武編『新訳英和辞典』(三省堂、1902年6月)、p.463.
- (2) Ditto.
- (3) 長谷川方文編『新英和辞林』(六盟館、1903年3月)、p.205.
- (4) Ditto.
- (5) 磯部清亮編『最近英和辞林』(波多野商会、1904年9月)、p.377.
- (6) Ditto.
- (7) 上野洋一郎等編『学生英和辞典』(博報堂、1910年11月)、p.352.
- (8) 神田乃武・金沢久編『袖珍英和辞典』(三省堂、1922年4月、大改訂81版)、p.411.
- (9) Ditto.
- (10) 上野洋一郎等編『学生英和辞典』(博報堂、1910年11月)、p.352.
- (11) 岡倉由三郎編『新英和中辞典』(研究社、1929年夏)、p.350
- (12) Ditto.
- (13) 岡倉由三郎編『初級英語辞典』(研究社、1933年9月)、p.251.
- (14) Ditto.
- (15) 大島清『片言まじりの佛蘭西行き』(白水社、1930年1月)、pp.48-49.
- (16) 佐々木隆『書誌から見た日本ワイルド受容研究(大正編)』(イーコン、2007年11月)、

p.116

- (17) 滑川道夫『日本児童文学の軌跡』(理論社、1988年9月)、p.340.
- (18) 小泉八雲／大谷正信「万聖節の夜」(大谷正信『小泉八雲全集』第17巻、第一書房、1928年1月)、p.23.
- (19) 小泉八雲／西崎一郎編『BUYING CHRISTMAS TOYS』(北星堂書店、1939年12月)、p.4.
- (20) ラフカディオ・ハーン／速川和男訳「ハロウィーン」(森亮他訳『ラフカディオ・ハーン著作集』第2巻、恒文社、1988年4月)、p.16.
- (21) 小泉八雲／西崎一郎編『BUYING CHRISTMAS TOYS』、p.5.
- (22) ラフカディオ・ハーン／速川和男訳「ハロウィーン」、p.17
- (23) 小泉八雲／西崎一郎編『BUYING CHRISTMAS TOYS』、p.6.
- (24) ラフカディオ・ハーン／速川和男訳「ハロウィーン」、p.18.
- (25) 水谷まさる「アメリカ通信 萬聖節の前の晩」(コドモ社編『童話』(第6巻第12号、1920年2月)、p.94
- (26) Ibid., p.95.
- (27) Ibid., p.96.
- (28) Ibid., pp.96-97.
- (29) Ibid., p.97.
- (30) Ditto.
- (31) Ibid., p.99.
- (32) 二上洋一「日本大百科全書(ニッポニカ) 水谷まさる」
<https://kotobank.jp/word/%E6%B0%B4%E8%B0%B7%E3%81%BE%E3%81%95%E3%82%8B-1112308> (2020年8月12日アクセス)
- (33) 「デジタル版日本人名大辞典+Plus」
<https://kotobank.jp/word/%E6%B0%B4%E8%B0%B7%E3%81%BE%E3%81%95%E3%82%8B-1112308> (2020年8月12日アクセス)

キーワード：ハロウィーン、水谷まさる、小泉八雲、ラフカディオ・ハーン